モノ・グラフ

# 社会と時代が織りなした ナシ族画家の出現

横山廣子
民博 民族社会研究部
専門は文化人類学。中国雲南省と隣接する地域に住む人々の社会組織、文化変化、民族意識、民族間関係などを研究してきた。社会環境と個人の意識や行動との関係に興味がある。

張雲嶺の絵画を初めて見たのは、一九九〇年。「日本に来た」という電話が突然、雲南の知人からかかってきて、原宿に出かけた。表参道の画廊でナシ族の画家の個展があり、知人は画家に同行して来たのだという。日本で雲南の画家の個展というのは初めて聞く。一体、どんな絵なのだろうかと出かけた。

絵を見て驚いた。彼の作品群は、ナシ族の宗教的職能者が伝承してきた「トンパ文字」を絵の造形表現に取り込み、独特の詩情を醸し出していた。強烈にナシ族を感じさせる一方で、それまでよく見ていた「少数民族を描いた絵」、つまり民族衣装や時に女性の細い腰を強調したりするような絵に見られる、一種のエキゾチシズムとは一線を画していた。

六月二三日まで民博で開催する企画展「ナシ族画家が描く生活世界―雲南省西北部ではぐくまれた絵心―」は、この張雲嶺と張春亭という画家の作品を取り上げている。

「ナシ古画　祭りの楽しさ～冬の情景～」
張雲嶺　2002年　標本番号H0237930
冬は歌い、踊り、飲み、楽しむ季節。恋の歌を響かせる笛の音に、二人の女性も山の動物たちも聞きほれる。頭にとさかのようなものが付くのは女性、三つに分かれた帽子のようなものが付くのは男性をあらわすトンパ文字

「ナシ古画　狩猟の季節～夏の情景～」
張雲嶺　2002年　標本番号H0237928
夏になると人々は農作業の合間に放牧や狩猟に出かける。描かれている3人に特徴的な目は、トンパ文字で「見る」を意味する文字。画家は眼光を誇張したこの表現を好んで使う

張雲嶺は、ナシ族の中心地、麗江地区で一九五五年に、張春亭はそこから数十キロ離れた石鼓地区の農村で一九五八年に生まれた。画家としての活動がいずれも八〇年代後半に始まるのは、両者とも三〇歳前後までにある程度力を蓄えたからだという見方もできる。しかし私は、二人の画才が、彼らを取り巻く社会と時代のあやの中で伸ばされていったことと深くかかわっていると考えている。

## 文化大革命期に始まる画家への道

二人が物心ついた頃の中国は、人民公社化に突き進んでいた。「トンパ」と呼ばれる人々がとりおこなうナシ族の宗教儀礼は、迷信のレッテルを貼られ、衰退の一途をたどった。他方、少数民族が伝承してきた文化は「民族研究」の対象となり、六六年から始まる文化大革命の一〇年間は中断したが、調査や整理が進められた。こういった社会状況は、二人が画家となっていく道をかたちづくった。

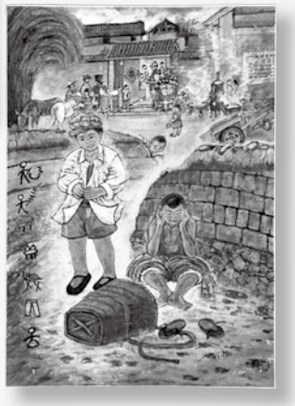
文革時代末期、両者はそれぞれ絵の腕前を磨く場を得ることになる。七四年に中学を卒業し、家で農業をしていた張春亭は、共産党の宣伝のために絵を描く役割を村から与えられた。「プロパガンダ絵画」を量産したのである。他方、高卒の張雲嶺は知識青年として農村に住んでいた。麗江で開かれていた「工農兵美術クラス」には参加資格がなかったが、七五年に講師として来た大学教授に会い、才能を見込まれ、その後、昆明の大学で中国画を学ぶことになる。

政治が改革解放路線に転じた八〇年代、新たな境遇が訪れる。張雲嶺は大学卒業後、麗江の群芸館に職を得る。群芸館は公共文化施設として社会主義体制下の各地に設けられ、文化全般にわたり、娯楽活動の組織もすれば、調査研究もするといった地域の文化拠点である。彼はここでナシ族の民間芸術や文化遺産に触れる。特にトンパが儀式で唱える文言を記録するのに用いた絵のような「トンパ文字」を初めて知り、深く入り込む。トンパが使う竹筆の作り方や鉱物顔料にも精通した彼は、やがてトンパが伝承してきた文化と自らの芸術センスを合体させ、「現代トンパ画」と称されるようになる画風を確立していく。他方、張春亭は、経済活動が自由になる中、八四年から石鼓の町に出て、映画広告を描くようになる。八六年、張雲嶺の作品はパリで開催された「中国雲南絵画展」に出品され、張春亭は映画広告画で省の優秀賞を受賞する。

## 民族文化・観光・画業の確立

天安門事件をはさんで中国が経済発展のギアを入れなおした八〇年代末から九〇年代初め、二人にも変化が生まれた。

「しっかり勉強するんだよ」
張春亭 2003年 標本番号H0237951
町の市場に物売りにきた夫婦。まっさきに店先の公衆電話に向い、妻が話す声が画家に聞こえた。相手は、親と離れ、学校で学ぶ子ども。学費の仕送りの遅れを詫びる母親に、奨学金がもらえたから心配しないでと子どもは告げた。涙を流しながら母親は言った―「しっかり勉強するんだよ」



「兄と弟」 張春亭　2005年
標本番号H0237948
婚礼に着ていく服がなく、兄弟で一枚のシャツを交替で着て、ご馳走の席に出た幼い頃の画家自身の思い出

張雲嶺は八八年の雲南民族芸術祭期間中に昆明で開いた個展が国内外の来場者の評判になり、日本に招かれ、彼を認めた雲南民族博物館長の支援を受けるようになる。その後、九五年に職を麗江から昆明の民族博物館に移し、画業に専念できる環境を得る。

張春亭は、九〇年に映画館が麗江県の映画会社に売却されたのを機に農村に戻る。その後、漢字の字句を添えた水墨画など中国風の絵画を試みたりもするが、以前に描いた人物画が観光客の目に留まり、購入されたのをきっかけに、身の回りの人々や生活を題材とする農民画を描いていこうと決意する。これにより、幼い頃の思い出や実体験をもとに描かれる、ナシ族の暮らしの中のエピソードに満ちた彼の画風が確立した。

九〇年代後半以降、雲南省、ことに九七年に街並みが世界遺産に登録された麗江では観光化が進み、トンパ文化の観光への活用が盛んになった。かつてはトンパの手で経典用にだけ漉かれていた「トンパ紙」の生産も一般人によって拡大した。二人の画家は好みのサイズのトンパ紙を注文して絵を描くようになった。国内外からの旅行客の増大につれて、作品の購買者は徐々に増え、近年、画家としての地歩は一層固まりつつあるように見える。

こうしてみてくると、二人の画家の出現には、それぞれの才能や努力が下地にあるとはいえ、画家としての技能や個性を磨く機会や画家として生きる居場所を与えている社会や時代の関与があるように思われる。周囲の人々から画家として認められる人間は、いつの時代にも、またどこの社会にでも存在しているわけではない。

トンパ経典
標本番号
H0237785
トンパによる儀礼が衰退したのにともない、経典も散逸してしまった。近年は新たに制作している地域もある

トンパが経典を書くのに使う手製の竹筆。細竹でつくる。張雲嶺も自分で竹筆をつくり、それで輪郭線を描く〈個人蔵〉